〈歓〉と〈憂〉の雪模様

久保田　智栄子

本歌集は、あとがきによれば、勤務校を定年退職する前後の二〇一八年から二〇二三年までの自選歌四〇〇首を収める第五歌集である。作者の言を借りれば「節目となる歌集」だ。

豆腐屋のらつぱのやうな声あげて落ち穂つ
いばむ白鳥の群れ

前歌集『サント・ネージュ』巻頭では「残雪より生まれしごとく白鳥は群れて雪間の落ち穂を拾ふ」とうたい、純白の羽の優美な白鳥の姿に焦点をあてていた。ところが、本歌集では「豆腐屋のらつぱ」に白鳥の声を見立て、どこかのどかでユーモラスだ。落ち穂をついばむ白鳥に聴覚を働かせつつ、前歌集とは雰囲気の異なる白鳥として描写している。この親しみやすさは歌集全体の雰囲気とやんわりつながると思われる。他の歌をひもといてみたい。

キロキロと小動物のやうな目をのぞかせて
みな大きなマスク

勤務校ではコロナ休校があけ、子どもたちはようやく登校できるようになった。これはその頃の歌。初句「キロキロと」には、生徒の不安と好奇心がないまぜになった複雑な心境が窺われ、独創的なオノマトペが印象に残る。

歌集序盤には、医師から病気の告知を受ける一連がある。

突然の縁組みなれどせむかたなし添ひ遂げ
ますかパーキンソン病と

作者は気丈に病気を受け入れ、病気の進行を遅らせるため一心に歩く。その際かつてウォーキングしたことを思い出す。

タチアオイの花びらおでこに貼り付けてコ
ケロッコーつて笑つたな、夏

タチアオイは径十センチ前後の大輪の花で、赤やピンク色が多い。それを鶏のとさかに見立てておでこにくっつけ、鳴き声をまねて同行の誰かを笑わせたのだろう。「コケロッコー」が絶妙である。

だが、ときにやりきれない気分になることもある。次の歌は「検査入院」と小題のある一連のうちの一首。

こうやつて病人になつていくのだらう光に
消されてゆく昼の月

閉塞感のある病室の人工的な照明の下、自分という存在が認識されにくくなってゆくことを、日中の月に見立てて詠ん

でいる。逃れようのない現実が固有の表現で描出され、心に刺さる。

けれども、そんな憂鬱な気分を明るく立ち直らせてくれるのが、勤務校の生徒たちである。

通院から戻れば「先生、お帰り」と窓から
手を振る　授業中だよ

教室に今年の漢字貼り出せば「やっぱ金(かね)か」と善太つぶやく

クリスマス礼拝まであと一週間ヨセフきら
ひとマリア出で来ず

マスクして歌ふハレルヤこの子らの明日に
やさしき光あふれよ

全力で懸命に先生としての役割を遂行する作者に対し、生徒たちは素直で軽やかに反応する。意表を突く言動に、思わず笑みがこぼれる作者の表情が浮かぶようだ。二首目の「善太」、三首目の「ヨセフ」と「マリア」といった固有名詞がそれぞれ効果的である。そして、四首目では、子どもたちひとりひとりの未来に祝福の光が溢れることを願う。

「光」の歌としては歌集終盤に、

われもまた牛飼の裔(すゑ)あたらしき春のひかり
を存分に浴ぶ

がある。これには詞書「牛飼が歌よむ時に世の中の新しき歌大いにおこる　左千夫」があり、明るいパワーを感じさせてくれる一首だが、本歌集中の「母と父」と題の付された「下北行」一連の歌の「牛飼ひの娘と代用教員と出会ひし山村ソバの花揺る」を念頭に読むと、両親の親愛を追体験するように春のひかりを享受する新鮮な喜びが伝わる歌だとわかる。

さて、あとがきにもあるが、学校の歌同様、「雪」が作者にとって大きなテーマである。雪の歌をみていく。

虎落笛ふきつつ踊る冬の神ひと夜踊ればひ
と山の雪

この雪はいつまで続く空深くコントラバス
の鈍き音する

老いびとは冬晴れ長者　消え残る雪を崩し
て春を呼びこむ

一首目の「虎落笛」とは、冬の強風が竹垣などの柵に吹きあたって鳴る寒々しい音のことだが、「冬の神」が夜中じゅうクルクルと動き回りながら雪を吹き散らせている様子が見えるようである。二首目は、エンドレスで雪を降らせる薄暗い空を、底ごもるコントラバスの響きに喩えた秀逸な歌だ。この歌に拠り、高野公彦氏が歌集名を『大空のコントラバス』と定めた。「大空の」が冠せられることで、空のはろばろとした広さが加わった。三首目は「お向かひの八十歳の母さんの踊りのやうな雪きり見事」の後に置かれた歌。「老いびとは冬晴れ長者」の暖かさと頼もしさに読者も安堵する。

はつゆきは〈歓〉をふぶきは〈憂〉を連れ
津軽野づらを白く染めたり

雪がいかに厳しい状況をもたらすとしても、丈高い姿勢を保ちながら背筋をすっと伸ばす福士さんの心は、常に青森に在り続ける。

かなしみの深さ

水上比呂美

歌集『秋の水深』は、田中愛子さんの歌集『傘に添ふ』に続く第三歌集である。愛子さんはあとがきで、「前歌集刊行から十年経ち、たくさんの方とお別れをしました」と述べている。集中で、作者の母の歌に惹かれた。印象に残った歌を抽く。

何千回呼ぶのだらうか「お母さん」呼ばるることはなき「お母さん」

母と三日夫と四日すごす日々の何かが充ちて何かが足りず

母の歌集、わたしの歌集、堀辰雄…をさめて母の舟しづみさう

一首目、愛子さんは三人姉妹の末っ子である。晩婚であった作者は姉たちより長く母のそばにいて、一番多く「おかあさん」と言っていることに気づいた。「お母さん」という優しい呼び方をいつまでも母に呼びかけたいという気持ちが温かい。しかし、一転して下の句に寂しさが滲む。作者には子どもがいないので、「お母さん」と呼ばれることはないときっぱり明るく詠む。

歌集の初めの方で、作者は定年退職を迎え、官舎を出て夫婦で埼玉のマンションに引っ越す。その後、夫が福井県に転勤になり夫は単身赴任する。母は信州で一人暮らし。その日常を端的に表現した歌が二首目である。大切な人といっしょに暮せない寂しさ、たまに会うからこその喜び、福井と信州と自宅を往復する作者の大変さが伝わってくる。

三首目、集中の半ば過ぎ、母は九十八歳で逝去される。棺を舟にたとえて、母の旅立ちに母と作者の歌集を入れる。歌集にはたくさんの思い出が詰まっている。そして、「堀辰雄」がいい。作者の母の乙女のような人柄が偲ばれる。「…」に、溢れるほどの気持ちを納めたということがわかる。

母と同様に大切な人、夫の歌は新婚さんのように瑞々しい。

髪切れる君は常より背が高く出迎ふるとき

われは背伸びす

春はメール夏は絵はがき秋はてがみ冬は土鈴のひびき送らん

道ならぬ恋へと走る顔をして豪雨のなかを北陸へ向かふ

一首目、作者の夫はすらりと背の高いイケメンさん。その夫が散髪に行ってさらに男前になって帰ってきた。「あら、素敵」と夫の髪に手を伸ばす作者と照れくさそうな夫の顔、まるでドラマのワンシーンのようだ。二首目は、夫の転勤が決まり、福井へ発った後の歌。春夏秋冬、彼への思いの伝え方が微笑ましい。冬の「土鈴のひびき」は作者の声だろう。美しい声の喩えに「鈴を転がすような声」という言葉があるが、愛子さんは「私の声は、土鈴くらいです」と謙遜して、ウイットに富んだ歌を詠む。三首目、激しい雨の中、夫をめがけてずぶぬれになって走っていく、ヒロインの作者の愛の量と疾走感に圧倒される。

集中には、水に関係する比喩が多く、しっとりとしている。タイトルの『秋の水深』は〈つゆしもの秋の水深はかるごとく母は歩めりひきあけの庭〉という歌から付けられた。秋の夜明け、庭をそろりそろりと歩く母親を「秋の水深はかるごとく」という比喩を使って詠んだ。足元までひたひたと水が寄せてくるような美しい情景が浮かぶ。

めぐすりを注してしばらくうつし身は運河
をゆるく下る夜の舟

紺いろのぶだうを間(あひ)にまむかへば夜は離岸
する船のしづかさ

一首目、目薬を注したときの自分を「運河をゆるく下る夜の舟」と比喩する。目薬が眼の奥へ浸透していくまでの、ゆらゆらする感覚を詠む。二首目は、夫の赴任先を訪れたときの歌。夜の海へ、紺色の葡萄と二人を乗せた船は静かに滑り出す。比喩に「船」を使っている歌は、遥かな水の景色が想像されてどこか懐かしい。

本歌取りというほどではないのだが、本歌をさりげなく想起させるような作り方をしている歌も魅力的である。

ヘルペスを告ぐれば「歌ができますね」友
は言ひたり「そりゃぁあなた」

ぬすびとのやうに汗ばみ街行けり不要不急
でなき外出に

朝のあめ目にはさやかに見えねども外出(そとで)の
君に傘を持たせる

一首目、斎藤史の〈疲労つもりて引出ししヘルペスなりといふ八十年生きれば　そりゃぁあなた『秋天瑠璃』〉という歌を思う。友もそれを承知で「ヘルペスになったの？歌ができてラッキーじゃない」なんて言ったのだろう。それに対してヘルペスは辛いのに、作者のユーモアのある返しがみごとである。二首目は、コロナ禍に夫の住む福井へ夫に逢いに行く歌ではないだろうか。高野氏の〈はまゆふのそよがぬ闇に汝を抱き盗人のごと汗ばみにけり『汽水の光』〉の歌が、背後にあるようで、言わずもがなのことを言いそうになった。

三首目は歌集の最後の歌。藤原敏行の〈秋来ぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる『古今和歌集』〉を彷彿とさせる。本歌は「秋の風」で孤独なイメージ、抽出歌は「朝のあめ」で明るい。前歌集の『傘に添ふ』の傘を思わせて、『秋の水深』までの十年分の夫婦の時間が、読者の心に沁みるのである。

海のリズム

伊沢　玲

有川知津子さんの第一歌集『ボトルシップ』には、平成十三年から令和三年夏までの作品四二五首が収められている。

長崎県五島列島の中通島で生まれ高校卒業までを過ごした有川さんの歌には、海のリズムとでも言おうか、波がくり返したゆたうような心地よいリズムを持つものが多い。そして歌集全体に、読む人をゆったりと包んで揺らす、柔らかさと懐かしさを帯びる世界が広がっている。

まず、ふるさとの歌と家族の歌から。

ぎいいといふ船のむつごと聞きながら渚を
ゆけり犬におくれて

誰が足の甲でありしかわれをのせ海のろん
どのステップ踏みき

船の軋む音や子どもの頃の思い出に波の動きが感じられる。「たぷんたぷん」というような穏やかな波である。天候によって海は様々に変わるけれど、作者の詩情の根底には優しい波が感じられる。波が心身に染み込んでいて、そうさせているように思えてならない。また、「船のむつごと」「海のろんど」という発想にも土地柄と個性を感じる。

ずんと重き金属製の双眼鏡祖父逝きてのち
海風知らず

捕鯨船の砲手であった祖父は南極海で殉職された。形見である双眼鏡を手にした感触が、祖父の逞しい両手や荒々しい漁の現場を想像させる。それは憬れに通う思いであったろう。作者には珍しい漢字と濁音の多用が効果的である。

ここはいいからはやく帰つてやすめと言ふ
ゆふぐれ祖母に手触れてをれば

祖母なくて正すひとなしかがみなす水屋の
奥にかしぐおちやわん

幼いころから作者の世話をしてくれた祖母の最期を詠んだ歌。祖母はコスモスの会員であった。一首目には孫娘をいたわる愛情が満ち、二首目には見慣れた食器棚の様子が描かれ、こんなささやかなところにも宿る悲しみが胸を打つ。

次に、有川さんの歌の最も作者らしい特徴のあらわれた歌をあげたい。ひらがなの多用、なめらかな言葉はこび、リフレインや対句を含む韻律の美しさに注目する。

あまやかに雨にほふなりあまやかな雨のに

ほひにわれ刃こぼれす
はなびらのひとつひとつに帆をかけて神は
その日をはからひたまふ
どこまでが夏のさざなみどこからが秋のさざなみ　まつげきらめく

一首目。雨の匂いにより心がほぐれ、多忙な日常生活の緊張感が薄れるイメージがすんなりと伝わる。二首目。満開の桜を前に、散る日を思う作者。祖母の逝去の近くに詠まれたこの歌の「その日」には二重の意味があり、神への祈りが込められて切ない。三首目。さざなみの照り返す光と、微かな翳りから季節の移ろいを描き、美しく絵画的である。

ひらがなが多いと一首を目で追うのに時間がかかるので、歌の喚起するイメージが読み手にゆっくりと伝わり長くとどまる。また、リフレインや対句は心地よいリズムを生むと同時に、一首に言葉や意味を詰め込まず、歌をシンプルにする。有川さんの歌にごく自然に流れる音楽的美質やふくよかなゆとりのある理由が、ここにあるのではないだろうか。

次に、叙景の素晴らしい歌をあげたい。

みづうみの底へ梯子を差し掛けて屈折率をはかる神々
かすかなるとどろき聞こえモルフォ蝶はたたくごとき雲がひろがる
木をつたひ墓石をつたひ目をつたひ海へ流れてゆくしろい雨

詩的想像のなせる歌、比喩の優れている歌、丁寧な観察による写生の歌、どれも見事である。一首目の「梯子」は雲の切れ間から陽光が柱状に射す「天使の梯子」であろう。「底へ」から透明度の高い湖が思われ、より一層荘厳である。二首目の「モルフォ蝶」は目の覚めるような青色の蝶。稲妻により浮き上がる雲を幻想的に描く。三首目。カメラワークが巧みであり、叙景と抒情が融合している。

また、独特の身体感覚に因る秀歌も多い。

かろやかに春野をゆけどいにしへは踏み絵に掛けし足かもしれず
ルノワールの描くやうなる木漏れ日に揺られつつ来て木漏れ日酔ひす

一首目。春野を歩く自身の足から、時空を超えた踏み絵の場面が展開する感覚。「踏みし」ではなく「掛けし」としたことで、ぎりぎりの瞬間の苦悩を鮮やかに再現する。二首目。多くのラ音と「木漏れ日酔ひ」という造語、うねりのあるリズムにより、眩暈のような感覚を表して印象深い。

航海図すこしゆがみて広げらるボトルシップの船長室に

最後に、歌集名となった歌について。「すこしゆがみて」にリアリティーがある。精緻に作られた船の模型は、大海原の陽射しや潮風を伴って、ガラス瓶の中に永遠に守られているように見える。それはまるで有川さんが、ご家族や故郷への思い、またご自身の繊細な心の有り様を一首一首の歌に詠み、この歌集に大切に収めた姿と重なる。さらなる航海を意欲的に続ける有川さんの歌を眩しく見ていきたい。

光に呑まれまた生る

三浦陽子

歌集『秋の助動詞』は山田恵里さんの第一歌集で、二〇一〇年から二〇二二年春までの約十二年間の作品の中から四六四首が収められている。

すぎゆきを振り返らせるもみじ葉は過去推量の秋の助動詞

歌集のタイトルになったこの歌は、もみじ葉を「秋の助動詞」と捉える感性の豊かさを凝縮した一首である。

山田さんは、高校の国語科教師であり三人の娘さんのお母さんである。多忙な生活の中で紡がれた歌はどれも引き締まった客観性のある作品である。

歌集は、家庭環境に困難を抱えている高校生に寄り添う歌群から始まる。

前になり後ろになりて生徒らの列を見つめる「一人」はいないか

潮の香の風が引き出す学校の箱の中では聞けないはなし

遅くまで生徒の心を聴くこの夜我が子はひとり布団にもぐる

三つ目の名字、異父妹、義兄弟、面接に知る十五歳（じゅうご）の人生

入学後の親睦を目的とした行事であろうか、はやくも社交性を発揮する人もいれば、そうでない人もいる。生徒に交じりながら観察する教師の視線はあたたかい。作者の感性は学校を「箱」と把握し、その中では言いだせない、たとえば生い立ちや恋愛などが潮風に誘われるように生徒の口から話される。作者は複雑な家庭環境や家庭内DVの問題にも直面もする。生徒に寄り添い、地域社会や生徒指導の議論からも生徒を守ろうとする山田さんの姿を想像せずにはいられない。そんな中、ふと内側に兆す思いというものがある。三首目は、生徒の心に夜遅くまで寄り添いながら、さびしい思いをさせている幼い我が子を思う瞬間を詠う。だがその思いを瞬時に封印する術は悲しいかな身につけているのだ。

「奥さん」の口まね流行り「よござんす差し上げましょう」と授業売るなり

よっぱいてひょうと鏑矢（かぶらや）放つとき我もヒョーッと敵陣に飛ぶ

「まだ本気出してないし」と嘯ける小さな
李徴が四十二人
引き出したアルミホイルを戻すごと訂正を
せり昨日の授業

教科指導をする山田さんは楽しげで軽快だ。一首目は、漱石『こころ』の授業の後。小説の中の「奥さん」の拍子抜けするほどさっぱりとした口調が流行ったようだ。文化祭前の生徒からの申し出であろうか、作者もさっぱりと授業を「差し上げ」るのだが、「売る」と言っているのだから厳しい課題を用意していたのかもしれない。三首目は『山月記』。臆病な自尊心と尊大な羞恥心を飼いふとらせた李徴の告白に、息をひそめておのれを重ねる高校生。嘯く若者にリトル李徴を見て、あたたかい。四首目、授業は一時間の真剣勝負である（理想）。きのうのミスを訂正するときの気持ちのざらつきを「引き出したアルミホイルを戻すごと」とみごとに言い表している。これ以上の比喩はない。

六限にのそりと開く弁当のゴムパッキンに
つぶれたオクラ
学校に閉ざされて我が一生（ひとよ）あり寒天質のご
とき夕ぐれ

一首目、まさにこれが高校教員の生活だ。短い昼休みには生徒が来る、係会はある。空腹も忘れたころようやく開く弁当。「のそりと開く」がいい。もはやお弁当には何の期待もしていないが、オクラの先がパッキンの蓋につぶれているのを見た時といったら。二首目、無我夢中で走ってきた教員生活もそろそろ終点が見えてきたころ、「我が一生」を過ごした学校というところは閉ざされた場所ではなかったか、という感慨。「寒天質のごとき」の比喩が心に残る。

試合前ノックの締めはキャッチャーに　球
は光に呑まれまた生（あ）る
教室の窓よりうろこ雲ながめふりむけばし
ばし暗む生徒ら

一首目、シートノックの締めのキャッチャーフライの瞬間を「光に呑まれまた生る」と描いて力強く美しい。二首目、秋の光を眺めた後に振り向いた瞬間の教室の暗さを掬っている。「しばし暗む」に現実世界を見失ってしまったかのような不安も漂う。

我がからだビークルとして選ばれて来世ま
でこの誰かを運ぶ

「この誰か」は「我がからだ」を乗り物として選び、「わたし」としてこの世をわたるという感性。この客観性こそが作者の体幹をなしているのではないだろうか。

歌集では、娘さんたちの成長が客観性をもって詠われ、夫君の愛情がさらりと描かれる。大切な人を亡くす悲しみも抑制して詠まれていて心に残る歌が多い。この評文が仕事にまつわる歌に偏ってしまったことをお許しいただきたい。

歌集には、梶原さい子さん、大松達知さんの文章が栞として添えられていて、作者の将来性を伝えるものである。私は、山田さんの今後の作品を楽しみにするひとりである。

終焉をみつめて

岡田万樹

『癌人（ガンマン）のうた』は、令和四年に亡くなられた荒巻和雄さんの遺歌集である。昭和十二年生れの八十五歳の逝去であった。コスモス入会は、昭和三十六年、二十四歳の若さである。教職の傍ら歌を詠み続けられた後には、宮崎支部の支部長となられ、後進の指導にあたられた。

パソコンに残された六百余首の作品から、佐賀の小嶋一郎氏が選をされ、睦代夫人が何首かを加えられて、四百九十四首の歌集となった。

いまだ咲く花は花とし芽吹きたる緑をひろぐ桜の枝は

瑠璃色の空をそびらにこまやかな緑葉吹きたり銀杏並木は

仰ぎたる公孫樹若葉に隠れつつ土鳩が一羽ひもじく鳴けり

歌集巻頭に近い歌。最初の癌（腎盂癌）を病んでから七年ほど経った頃の作。まだ静かに周囲に目を注いでいる。

しっかりと対象を見つめて詠まれていて魅力ある作品となっている。若葉が芽吹き緑がひろがる枝にいまだ咲いている桜の花、ひもじく鳴く土鳩に、何かしら作者のこころが投影されているように思った。

宮柊二歌碑の寂びたり朝日差す門司城跡に鵯さわぎつつ

梅檀の木の間より降る朝光に歌碑を流れし酒かをるなり

新聞の訃報の欄の享年に吾の余命を朝あさ計る

河鹿鳴くその声色を懐かしむ木原昭三さん逝きしを聞きて

餅搗きを止めて久しも庭隅に石臼ひとつ雨水を溜む

この一冊を通して言えることは、作者が尊敬してやまぬ宮柊二への想いと歌を詠むことにある。

初めの二首は北九州市の和布刈歌碑を詠んだ作。九州在住のコスモス会員にとっては和布刈歌碑は聖地である。いま流行の言葉で言えば聖地巡礼といった歌である。三首目は肺癌、咽頭癌が見つかった後の感慨。背後を知ると「余命」に深い

想いが込もる。

四首目はその感慨の中で九州の先輩歌人である木原昭三氏を悼む歌。五首目はそうした生命への想いが「石臼ひとつ雨水を溜む」に込められている。

スーパーの二十パーセント引きなる肴もて
妻が不在の夕べを済ます

気に入りて遺影と決めし一葉もいささか若
くなりてしまひぬ

カラオケへはたダンスへと忙しなき妻の気
分はもはや寡婦なり

声帯を取ると言はれて晴天の霹靂なりこ
は　煙草を止めぬ

鵯の来ずまつたうしたり紫木蓮つぼみより
花の腐れるまでを

例年の「あやめおどり」へ参加すと七十路
の妻いそいそ出掛く

里の柿三十あまりを軒下に暖簾作りて妻は
掛けたり

古希、喜寿といつきに過ぎて傘寿越え前科
五癌が生かされてゐる

あと幾首詠めるだらうか傘寿なる前科五癌
が終の日までに

この歌集には妻のことが多く詠まれている。時々は揶揄しながらもどの歌も愛情深いものである。明るく、そしてプロ並みのお世話をなさる睦代夫人に全身をあずけておられたのだと思う。

一首目。「二十パーセント引き」に具体がこもる。夕方になってスーパーへ出かけたのだろう。男やもめのような夕方でほのかな寂しさが滲む。三首目。活動的な妻を少し揶揄したようだが、その底にはふかい愛がこもっている。

この時期になると癌との闘いも達観の境地に入ってくるようだ。二首目。遺影と決めた一葉が「いささか若くなりてしまひぬ」と歌うことで時間の経過をうまく表現している。と同時に生きのびた、という心が籠められている。

八首目。癌を病みながら古希、喜寿、傘寿を過ぎた感慨。「前科五癌」という造語に作者の生来のユーモラスと長年の作歌による巧みな技法がみてとれる。九首目はまさしく歌人としての実感。しかし作者はこの歌を詠んだ後、五年間を生き、歌い続けた。そこには作者の強い意志とともに睦代夫人の懸命の看護があったに違いない。歌人夫婦のお手本のようである。

下咽頭癌術後五年を異常なく診療終了と今
日つげられぬ

これは歌集の最後の一首である。なんとなく微かに回復への希望を持っておられるかのようで胸が痛む。しかし、作者は心のどこかで終焉を見つめながら、一日一日を大切に生きておられたのだと思う。「生病老死」、生の裏側にある終りを見つめながら、私も残された日々を大切に生きていこうと思う。

大きく咲いた歌の花

森田則子

歌会に初めて出でし弾みもち千曲にかかる
橋渡り来ぬ

初めて歌会に出席した心弾みのまま千曲川にかかる橋を渡る作者の初々しさがうかがえる一首である。この歌から始まる歌集『コスモス咲けり』は、長野県佐久市に在住の小沢京子さんの第一歌集で、コスモスに入会した一九七六年から二〇二二年までの作品四三七首が収められている。

およそ半世紀にわたる作品は宮柊二と会した時のエピソードや師を偲ぶ歌などコスモスの歴史を感じさせる。また、父祖の地である佐久への深い愛着から生まれた歌はいずれも優しく、その思いが作歌を続ける原動力となっているようだ。

年代が前後するがテーマに沿って見ていきたい。

コーヒーに噎せませる師の背をさする川辺
古一氏の大き掌

わがかたへ浴衣の裾をからげたる柊二師坐
せば胸は高鳴る

二首とも全国大会の懇親会での様子と思われる。作者が間近で目にしたのはコーヒーに噎せてせき込む浴衣姿の宮柊二。すぐにその背中をさする川辺古一の柊二への敬愛が感じられる一コマだが、川辺古一の掌の大きさに注目したところが興味深い。二首目、尊敬する師が自分の傍で寛ぐ様子を見ているだけで感動と緊張で胸が高鳴るのも無理はない。和やかな宴席の光景が目に浮かぶ。柊二に会うことも教えを乞うことも叶わなかった者として羨ましく思う。

次に信濃の香りのする歌を四首引く。

郷土食つくる宿題もち来たる少年と励む信
濃のおやき

言ひ伝へ守り四と九の日を避けて晩夏野沢
菜の種を蒔くなり

落葉（らくえふ）のしんがりつとめからまつは錆びたる
針をしきりに降らす

おぼさんは膝の方言おぼさんは赤チンとい
つも仲良しだつた

一首目、「おやき」を作る宿題とはいかにも信濃らしい。郷土の食文化を次世代に伝えてゆく楽しい時間だったに違いない。二首目では、野沢菜の種蒔きは四日と九日を避けると

いう。死と苦に通じるので先人達は避けたのだろうが、あの美味しい野沢菜を作る経験則なのかもしれない。三首目、他の樹々が葉を落とし終えてから最後に葉を落とす落葉松。葉の色と形を錆色の針と的確に描写し、風に葉を落とす信濃の落葉松林の荒涼とした冬の光景を彷彿とさせる。四首目、水銀の問題で製造中止となった赤チンを懐かしむ世代は多く作者もそのひとりだろう。「おぼさん」という愛らしい方言をうまく用いて元気な子供時代を追想している。

作者は折々の社会の出来事にも広く目を向ける。

まなこ澄む少年汝をもつゆゑに軍拡の声おびえつつきく

消費税加へてレジに桁一つ上りしを己が罪のごと詫ぶ

青稲を大鎌に夫は刈り払ふ減反割当てにまだ充たざれば

水を張る田の増えてきて蛙らがコロナコロナと騒がしく鳴く

一首目、最近の歌かと思ってしまうが約半世紀前の歌であることに驚かされる。昭和十二年生まれの作者は幼い頃に戦争を体験しており、軍靴の響く時代の再来に対する危惧はよく分かる。戦争と無縁な少年であるわが子の澄んだ瞳を見るにつけ軍拡の声に不安が募る母の気持ちに共感する。二首目、消費税の導入により、定価に消費税が加わって値段がひと桁上がってしまった。書店に勤めレジを打つ作者は心苦しさに思わず詫びたのだろう。実直な人柄がうかがえる。三首目は丹精込めて育ててきた稲を減反政策のために青いまま大鎌で刈らねばならなかった夫を詠む。夫の無念さと心中を慮る作者のやりきれない気持が伝わってくる。「まだ充たざれば」から政府の農業政策に振り回される苦悩が滲む。四首目、新型コロナウイルスは四年を経ても罹患者は増減を繰り返している。蛙の鳴き声が「コロナコロナ」と聞こえたのもなるほどと思う。聞き做しがウィットに富んでいて効果的。

美しい五月の季を選びしか花盛りの庭を夫は出で立つ

かしの実のひとりの夜は人恋し妖怪も来よ笊ころがさん

一首目、苦楽を共にした夫との永訣という耐え難い悲しみが襲う。花々の咲き盛る良い季節を選んだと思えることをせめてもの慰めとしたのだろう。彼岸へと旅立つ夫への深い情愛を静かに詠んでおり、そこに計り知れない悲しみがある。二首目の妖怪は佐久市に伝承の〈いざるころがし〉か。夫を亡くし一人暮らしとなった夜はたとえ妖怪であっても来て話相手になって欲しいと願う心情が切ない。

厳冬の日々重ねつつ窓の辺の蘭のつぼみが徐々にふくらむ

厳しい冬の間も窓越しの陽の光を浴びて蕾を膨らませる蘭は、長年の研鑽の集大成として歌集という大きな花を咲かせた小沢京子さんの姿に重なる。良き歌の仲間と良き風土に囲まれて誠実に詠まれた歌は尊い。益々のご健康とご健詠をお祈りいたします。

いつも前を向いて

立石千代女

『彼岸花咲く』は池野京子さんの第三歌集である。二〇一一年から二〇二二年（年齢にすると八十歳から九十一歳）までの四百七十九首が、大松達知氏の選により収められている。

博多祇園山笠を詠んだ一連で歌集は始まる。

法被着る男衆のゐる博多なり寒き春過ぎ早
や夏来たる
啓蟄の虫らのごとく出番来て活気づきをり
男衆たちが
走りつつ山笠舁く男それぞれに目にも止ま
らぬ早さで替はる
サラリーマンも記者もパン屋の若衆も山笠
舁くための「流れ」の一人
一番山笠「祝ひめでた」を歌ふとき博多人
吾れ手拍子に和す

櫛田神社の神事である山笠は毎年七月一日から十五日にかけて開催される。梅雨明け前であっても法被姿の男衆が出てくれれば博多は夏なのだ。二首目の「啓蟄の虫ら」が秀逸。三首目、四首目、街じゅうの男たちが山笠を担いで勇壮に疾走する様が読み取れる。五首目、東京生まれで十歳の時に福岡へ越して八十年余り、すっかり博多人の作者である。

冒頭は山笠の一連だから力強く男性的なのだなと思いきや然にあらず、集全体に渡って端正でキリッとした歌が多い。作者は保護司や家庭裁判所の調停委員として社会と深く関わりつつ、女性の地位の向上に生涯を賭けてきた人である。それにまつわる歌を挙げてみよう。

県知事に〈婦人の翼〉を提起せし友の訃報
を聞く新年会
「女性の翼」団長吾を励まししペンダント
なる父の肖像
皆無から三割に増ゆ女性市議　わが住む地
域の選挙速報
引揚げ時、性暴力に身籠りて掻爬されにし
一万人はも

一首目、のちに自らが団長を務める「女性の翼」を提起した友の訃報を新年会で知った衝撃。二首目、団長として海外へ行くとき付けていたこのペンダントは今も作者を支えてく

れている。三首目、作者が蒔いた種は成長ししっかりと実を結んでいる。四首目、敗戦後大陸に最も近い博多港には兵や民間人ら約百四十万人が順次引き揚げて来た。その中にはソ連兵などからの性暴力により身籠った女性がいて、当時禁じられていた堕胎術を特例として施したという。この事実は戦後数十年経って明るみに出るのだが、その数一万人とは。

その他の社会詠、時事詠にも佳作が多い。

特攻兵飛び立ちゆきし基地いまは五万のコスモス揺れゐる浄土　（旧大刀洗陸軍飛行場）

セントーサ島で演技を競ひ合ふ三文役者ドナルド、ジョンウン

時ならず浮かぶ軍歌のメロディーよ「前夜」のごときこの日々にゐて

地域の美野島小学校の閉校を詠んだ一連が心に残った。

登るありブランコ漕ぐあり下がるあり榎に遊ぶ子どもら自在

みのしまの歴史を子らに語りをり千年生きし媼のやうに

天高く惜別の情溶けゆくか飛行機仰ぐ人文字の子ら

一首目、動詞の多用によって子どもたちの動きがありありと目に浮かぶ。シンボルだったこの榎は新校舎の邪魔になるので伐られてしまうのだ。二首目、千年前の出来事をまるで見ていたかのように語ったのだろう。三首目、運動場に人文字を作って閉校の記念撮影の場面、上の句が素晴らしい。

さて、先進的な社会活動の一方で作者は家族を愛し、家族に愛される。友人たちとの関係も然りで、友人の逝去を悼む歌が随所にあるのもこの歌集の特徴と言える。

ゆつくりと静養せよと言はぬ夫早く帰つて来いとも言はず

「行って来ます」少女が朝々声かける七時半なり起きねばならぬ

飲みに行く誘ひ断りし悔い持ちて遺影の友とワイン汲み交ふ

「まだ死なんばい」夫の言葉に東京より来たる息子は笑みのみ返す

一首目、作者の入院中ご夫君のなんとも言い難い気持ちがよく伝わる。二首目、作者が休んでいる部屋に向かってお孫さんが毎朝挨拶するのだろう、素敵な家族だ。女孫ではなく少女としたところも爽やかさに通じる。三首目、誘いを断ってごめんねと謝りつつ遺影の友と汲み交わすワインの味や如何に。四首目、本集の中で唯一とも言える方言がいい味を出している。死に近い父親に対して「笑みのみ返す」息子の心中が推し量られる。

歌集名は次の歌に拠る。

湿度なき風の吹き来て庭先に彼岸花みな空指して咲く

真っ直ぐに空を指して咲く彼岸花は、女学校に通う頃から微力ながらも人のためになる生き方をしようと考え、真摯に実践してきた作者の人生と重なるようである。

ふるさとの空を心に

薄　葉　茂

『終古の空』は昭和四十一年にコスモスに入会し、歌を詠み続けてきた摩尼久晴さんの第一歌集。五十七年という長い歳月での作品のうち、平成十年から令和四年まで二十四年間の四百三十九首を、年代順に三つの期間に分けて収めている。出身地は新潟県の島、佐渡。海を渡り、郷里から離れた新潟県内で教員として暮らしつつも、摩尼さんの原点は佐渡にあった。

百数十年わが家守りし松林丸太になりて草に転がる

潮騒の音のごとくに松籟を聞きしふるさと離れて久し

美しき銀漢南へ走る佐渡　終戦の日の夜空は澄めり

歌集は愛郷心あふれる作品から始まる。一首目は巻頭歌で、屋敷森として佐渡の実家を百数十年も囲ってきた松林がなくなってしまった寂しさを詠む。景色が変わり果ててしまったからこそ、望郷の念はより強くなる。二首目の「松籟」は松の梢に吹く風。作者の家族にとっては木々に吹きつける音が、浜辺なら潮騒のように暮らしを象徴する音だった。三首目の「銀漢」は夜空の天の川。想起されるのは、松尾芭蕉の「おくのほそ道」の名句「荒海や佐渡によこたふ天の河」。旅人の芭蕉は日本海の荒海との対比で佐渡の星空の絶景を表現したが、作者は平和がようやく訪れた「終戦の日」の美しい故郷を描いた。

あんころ餅、豆餅、きなこ餅、祖母の味濃き粽また柏餅

笛の音（ね）の聞こゆるやうな佐渡の海こいちやこいちやと弟が言ふ

船腹をうつ波音を亡き父母の声聞くごとく渡りゆく佐渡

松籟の音を共に聞いた家族への思いも深い。一首目は記憶に残る味を詠む。あんこや豆、きなこなどで、さまざまな餅をこしらえてくれた祖母の姿を大切にしたいという思いを残す。退職後に佐渡の実家を受け継ぐことになる弟との会話を表現したのが二首目。笛の音が聞こえてきそうな佐渡の海の風景と、「来いよ来いよ」を意味する方言「こいちやこいち

や」の語感が相まって、穏やかな郷土色を醸しだす。三首目では佐渡に向かう船の腹を打つ波音が、亡き父母の声のようだと感じている。故郷を思い、亡き親を思う時に聞く波音は作者の胸に厳かに響く。

能の島鬼太鼓（おんでこ）の島流人の島朱鷺の島われを
はぐくみし島

先生の「朱鷺幻想」の歌碑の建つ初秋の佐
渡を思ふ日々なり

国仲は佐州のまほら水清み終古の空あり朱
鷺がふるさと

ふるさとの人に見守（ま）られ祈られて朱鷺の七
羽が冬を越えゆく

歌集には佐渡の国の特別天然記念物、朱鷺の歌が多い。朱鷺を詠むことは空を仰ぐこと。絶滅の危機を乗り越えて繁殖し、人々に愛される朱鷺はふるさとの宝である。一首目では佐渡の文化や歴史を詠む。島内には今も三十以上の能舞台が残り、鬼面をかぶって打つ太鼓の伝統は集落ごとの流儀で受け継がれる。二首目、宮柊二の「朱鷺幻想」の歌碑がふるさとの佐渡にあることを、誇りに思う作者がいる。三首目、朱鷺が息づく土地、国仲は佐渡の楽園。清らかな水辺から朱鷺が「終古の空」に羽ばたく神々しい姿が見えるようだ。四首目の朱鷺は雛鳥だろう。雪国の厳しい冬を越す七羽に温かい目を向ける、ふるさとの人の情が描かれている。

「戦争は悪だ」と詠める先生の齢（よはひ）思へばわ
れも近づく

楽しみの一つとなりし散髪の椅子に坐りて
老いをみつむる

人生は活字ではなく筆書きの生と思ほゆ雪
の降りつぐ

歌歴五十七年の作者が詠む老いの歌は味わい深い。一首目、柊二が「中国に兵なりし日の五ケ年をしみじみと思ふ戦争は悪だ」と詠んだのは、七十歳を過ぎた晩年。心に留めてきた師の一首を改めて味わうとき、詠んだ頃の年齢に自分が近いことに気づく。私は師のように、きっぱりと詠めるだろうかという自問も感じられる。二首目、鏡に映る自分の老いを認めている作者。「楽しみの一つ」には、ありのままの自分を受け入れる思いがにじむ。三首目、「人生は活字ではなく筆書きの生」は作者の人生観。もちろん筆書きするのは、自分自身である。降りつぐ雪を見ながら自身の「生」と真向かう時間はとても尊い。

魚野川の土堤より見ゆる越後三山まぶしく
そびえさけびたくなる

老いてなほ手足の爪ののびるなり切れば乾
きて遠くへ跳ねる

五年前から昨年までの作品から二首を引く。作者は柊二の故郷、魚沼市を流れる魚野川の土堤を歩いた。八海山などの名山が輝いて見え、心が動いたのだ。老いても体は生きようとしていて、爪を切れば跳ねる弾力があることに気づいた。師から学んだ「生の証明」、〈真〉を詠むことの大切さを伝える二首である。

家族を愛し　郷土を愛す

赤石智子

『父の居ぬ春』は、川端富起子さんの第一歌集で、二〇一五年から二〇二三年までの作品四四二首が収められている。小島ゆかり氏の選である。川端さんは六十歳の時に短歌をはじめ、二〇一五年にコスモス短歌会に入会している。歌集名は父の死を悼む歌から取られている。

父の居ぬ春にも桜は咲くだろうわがふるさとの〈一目千本桜〉

〈一目千本桜〉は、川端さんのご実家のある宮城県南部の大河原町にある。町を流れる白石川（しろいしがわ）両岸にこの桜並木がある。川端さんは高齢のご両親のため、家事手伝いにご実家に通われた。春になると、親子三人で〈一目千本桜〉を見に出かけた。

ふるさとの花見にちちとははと来て白石川はゆるりと流る

歌は平明、率直で飾りがない。しかもユーモアを感じさせる歌が散見するのが特徴だ。歌集を読んで気がつくのは、数多く家族を詠む歌があることだ。中でもご両親の歌が多い。次いで多いのは夫君の歌で、両者を合わせると歌集の歌の四割を占める。更にお子さん、お孫さんの歌を合わせると割合は増え、歌集の重心は家族にある。

九十三の父にポロシャツ贈らんと迷い迷いてピンクを選ぶ

干し物をくぐり散歩に行く父に洗濯の礼を言われる五月

難聴の父と向き合い涼しげに母は三時のスイカを食べる

門に立ちわれを見送る老い母を背に感じつつ曲がるまで娘

作者はポロシャツを買うのに迷い抜いている。そこに父上を思う気持ちがにじむ。選んだピンクには驚くが、父上には若々しく元気でいて欲しい願いが底にあるのだろう。二首目、父上が干し物の下を潜り、わざわざ洗濯の礼を娘に言ってから散歩に行く。その律儀な様子は、小津監督の映画「晩春」の父を思い出させる。三首目、難聴のため言葉少なく黙々とお三時を食べる父上。対して母上は、涼やかに軽やかにスイカを楽しんで食べている。作者はその様子をおかしく、微笑

ましく思いながら、一寸距離をおいて見守っている。その距離の分、仄かなおかしみが読み手にも伝わる。四首目、ご実家の手伝いを終え帰宅する娘。その後姿を立ち続けて見守る母上。ひしひしと母上の視線を背中に感じる娘。しかしそれも角を曲がるまで。曲がった途端娘から主婦の顔に変身。

前述のように歌集には夫を詠む歌も多い。

夫の焼く石蕗入りなる玉子焼き食めば海の香口に広がる

土砂災害、水害調査の仕事する夫の意気込み　少し宥める

玉子焼きを作る他に、夫君が味噌汁を作る歌もある。家庭ではとてもやさしい夫君。二首目、夫君の仕事には危険な災害調査もある。果敢に現場に赴き傷を負うこともあった。作者は心配してその果敢さをしずめようと言葉をかける。

また、作者はお孫さんに恵まれ、三人いらっしゃる。その一人の歌。

月夜行く十歳の手は温かく母の母なるわれに寄りくる

夜道を行く十歳は、眠くなったのか手が温かい。母親に寄り添うように祖母に寄り添ってくる。祖母冥利につきる一首。

歌集では家族の歌の他にも様々な題材が詠まれている。その中で数は少ないが、郷土を詠む歌が印象的である。郷土といっても作者の住む仙台、故郷の大河原を含む一帯を想定している。

わが母の手製の綿入れ半纏の〈どんぶく〉温し寒中なれど

標準語で半纏と呼んでも温くない。土地の言葉で〈どんぶく〉と呼ぶから温い。母の手製だから尚更に温い。

ようやくに見付けて孫へ届けたり堤焼なる雛人形を

作者は、初節句の雛人形は絶対に堤焼と決めていた。奔走して見つけ届けた満足感が出ている。堤焼は江戸時代、仙台で創製され、土人形の堤焼が有名。

早朝の舟形山をこつこつと登りて探す漉油の芽

漉油は山中に自生する植物で、若芽が食用となる。舟形山（標高一五〇〇m）に早朝歩いて登るのも、その若芽を手に入れたい一心である。さぞおいしいのだろう。

閉院の医院の前の黄のバラが今日はしずかにしずかに満開

連作の一首。作者はこの医院で東日本大震災に遭遇。震災後医院は閉院した。バラが震災前と同じように咲いているのが却って寂しい。

暮れに会う老いたる人のほとんどが髪を整え正月を待つ

作者の住む仙台周辺の暮れの様子。正月を迎える老人達の美しい嗜みは仙台という都市の奥深さを感じさせる。

歌集は父上の死を悼む連作で終わる。一編の私小説のようなこの歌集を読み進めて、最後の挽歌の連作を読み終わった時、目に滲むものがあった。

四季の移ろいに思いを重ねて

四野宮和之

『七草のいのち』は吉山孝子さんの第二歌集。還暦を迎えてから本格的に短歌を学び始め、地元の市民短歌講座で鈴木英夫講師に出逢い「湖東歌会」に参加、その後コスモス短歌会に入会。そして十二年前に第一歌集『風紋抄』を上梓。よって第一歌集以降の平成二十四年から令和五年までの三九八首がほぼ作歌順に収められている。神奈川県の小さな山村（現・相模原市）で生まれ、今は隣接する座間市に在住。恵まれた自然環境の中、八十代の日々を夫と穏やかに過ごし、その日常をありのままゆったりと詠い続けて来た。

うつむきてむらさきの花咲き初めぬわが手（て）

種（ぐさ）なる庭先の茄子

七草の粥を吹きつつ七草のいのち啜れり八十路の夫と

蕎麦汁の空きし小びんにつゆ草の藍の小花を活けて秋なり

著者が短歌を学び続けて来たのは「四季折々の移ろいの中に些細な身辺の思いを重ねられたら」との思いからである。その思いと人柄のよく現れた三首である。一首目、対象を温かい視線で見つめ、丁寧な描写により、やっと咲き始めた喜びを素直に詠っている。二首目、歌集名のタイトルになった歌。あとがきに「七草がゆを炊いて無病息災を祈るこの慣いを、老夫婦はことさら大切に思ってまいりました」とある。「七草」のリフレインがリズム感を生み、「七草のいのち」に、有難く頂戴するという厳粛さを感じさせる。三首目、素材の小びん、小花が効果的で、歌全体も飾ることなくありのままであり、つゆ草のような慎ましい暮らしぶりが伺える。

詠みたまひし「田舎の出なる」師の歌は田舎びと吾の力草なり

気を張らずゆつたり詠めと言ふごとき十二単の花のむらさき

老いたれば感性鈍きをうべなへど歌詠む〈孝子〉成長中なり

著者は短歌を学び始めた頃、白秋・柊二の詩情豊かな短歌、底知れぬ厚き層なすことばの表現に魅了され、岩波書店版『宮柊二集』第一巻を手にしたときの感激をきのうのように思い出すと言う。一首目、〈わが歌は田舎の出なる田舎歌素（す）

直懸命に詠ひ来しのみ〉の柊二の歌が、生きる上での絶大な「力草」なのである。二首目、庭に咲く「十二単」に気づかされたという可憐な擬人化であり、自身への戒めの歌。三首目、神奈川支部歌会に積極的に参加し、研鑽していた頃の作と思われる。「成長中なり」に向上意欲が漲っている。

わが町の魚屋、肉屋、八百屋までシャッター閉ぢて鉛色ロード

路地裏の角をまがれば新しき家並生れてれんげ田消えぬ

をとめごの吹けるオカリナ「故郷」を聴けば湖底の生家顕ちくる

ボールペン買はむと紙に試し書きす合併に消えし郷の名「不津倉」

少子高齢化の進展は、全国各地の生活環境を大きく変貌させている。一首目、どこにも見られるような過疎化による街の衰退の光景。廃業店舗を羅列した事実のみの描写が却って切なくまさに「鉛色ロード」である。二首目、開発地域があるものの、れんげ田が消滅するという具体が物悲しい。

折々思い出すのはダム建設に伴い津久井湖に沈んだ生家、故郷である。生家は承応三年より続き、父が創業した製紐工場もあった。三首目、心情のよく解る歌であり、オカリナの澄んだ音色が生家での幼少の日々を鮮明に蘇らせた。現在、湖畔は桜の名所の公園となっている。四首目、親しんで来た故郷の地名「不津倉」を今も忘れられず歌に遺した。

流れゆく雲より洩るる秋の日が夫との茶房の卓に満ちたり

いつの日か個となるふたり秋霖は音なく細く庭に降りをり

竹を割つた性のごとくに夫逝きぬ九月一日午前三時に

一首目、弓道にいそしんであんなに元気だった夫がいつか病院に通うようになった。通院の日は「デート日」と決め、馴染みの茶房で寛いだ。しかしながら、徐々に別れの予感を感じ始めたのが二首目である。「秋霖」という言葉の選択が絶妙であり、しめやかな抒情を醸し出している。そして突如、体調を崩して入院。二週間足らずで永別となった。三首目、感情を抑えて「竹を割った性のごとく」と感謝の意を込めながら、令和二年の夫の死を淡々と簡潔に詠った。

その後、心身ともに沈み、空しい生活に追われ、しばらく短歌の世界に足踏みが続いた。

庭すみの梅の古木に添へ木あり無口な夫の優しき遺品

ゆく先はすでに内定　残る世をゆるり見聞致したく候

卒寿の声を聞き、気持ちが落ち着いてきた。一首目、装飾品ではなく、梅の木の「添へ木」を遺品と捉えた感覚が奥ゆかしい。二首目、今までにない趣と調べのある歌。「内定」という意表をついた表現と下の句の巧みな言い回しにより達観した境地を詠いあげた。この歌のように「ゆるり」と日常を楽しみ、健やかに詠い続けて行かれることを切望します。

郡上に生きる

三木裕子

『踊り下駄』は、河合利子さんの第一歌集である。一九九六年から二〇二三年の作品から小島ゆかりさん選で四八九首が収められている。

踊り下駄は、郡上おどり（岐阜県郡上市八幡町）のための下駄で檜で作る事が多い。普通の下駄より少し高めの五十ミリ。丈夫で蹴り鳴らされた音が響くように出来ている。

下駄の歯をカラコロ鳴らし踊るなり男声女声のお囃子にのり

町役場まへの広場をあふれ出て踊りの輪うつる橋へ道路へ

二千足倉庫に眠れる踊り下駄店に並びて華やぎにけり

郡上おどりは、その昔、領民の融和のために始まったものらしい。踊りの中心は町役場の広場で老若男女が踊る。二千足あまりの下駄も店に並び、郡上八幡の夏は郡上おどり一色に染まる。作者も毎年この踊りの輪に加わっているに違いない。どの歌も動きがあって明るい。

朝なさな瓢嶺（ふくべね）仰ぎ暮らす里終のすみかのわが美並村

奥美濃にほそき動脈「長良川鉄道」ありて一輛がゆく

北斎の描ける阿弥陀が滝の景二百年後のいまも変はらぬ

北濃から嫁いで来た作者にとっての美並村は終のすみか。山間の木の香る空気や澄んだ光の溢れる所、美しい所だ。また、子宝温泉、古今伝授の里、荘川など郡上あたりの名所、地名の入った歌は八十五首もある。どの歌もその地に対する愛着が感じられる。北斎が描いた阿弥陀が滝は、「諸国滝廻り木曽路ノ奥阿弥陀が滝」で、その頃の風情は変わっていないと言う。作者にとっては特に感慨深い名所なのだろう。

七草が自前で揃ふこの里のくらしを愛す老いづきてなほ

春風にのりて流れ来詐欺電話に注意せよとの広報無線

蕪きざみ白菜きざみこの冬の「これにてしまい」の切漬を漬く

美並の生活はのどかで七草が自前で採れ、自前の野菜で切り漬けを漬ける事が出来る土地柄だ。作者は自然の中に身をおいた生活をしている。しかし、静かな集落にも詐欺電話がかかるなど容赦ない。スピーカーから注意喚起を促す放送は春風にのって家々に届けられる。日本の失いかけた助け合いが今も息づいている集落なのだ。その暮らしをいかに大切にしているかがわかる。当たり前のように表現している。

〈姑（しうとめ）〉とふこの紋所見えぬかとばかり強が
るはははのいとしも

十本の針に糸つけ並べおく姑の一日の縫ひ
ものため

怒鳴るごと言へばうなづく耳遠き姑みれば
ふと涙こみあぐ

姑様との関係は本物だろう。気遣う作者が目に浮かぶ。「この紋所……」とあるから嫁姑問題はあったのかもしれない。でも、姑様を愛おしみ、加齢性難聴の姑様を涙がこみ上げる程本気で心配している作者。亡くなられてからも、芋がらを食べると姑様を思い出してしまうほどの作者は、本当に慈悲深い人だ。

わが怪我を契機に家庭科一般を習得すと言
ふ夫いきいきと

孫といふ温かきもの吾に来て胸に抱けば涙
ながるる

大切にしまひ置きたる子の作文捨てがたく
また元にもどしぬ

姑様を大切にする作者はご主人や息子さん、お孫さんにも同じ眼差しを向けている。家事を手伝おうとするご主人に感謝し、お孫さんの誕生に深く感動する。お孫さんの赤いフェルトの靴や、枯葉まみれの雪だるま。そして、大切な息子さんの子供の頃の作文も宝物なのだ。自分から息子、孫へと継承されて行く姿に感謝しているに違いない。謙虚な作者にだから訪れるしあわせなのだと思う。

日本中にいくつの村が残るだらう「むかし
むかし村がいっぱいあったとさ」

なに言はず戦にながされゆきし父母その轍
を踏まぬと墓地に草ひく

戦争も平和も地つづき空つづき一つの星の
ホモサピエンス

小さな世界に生きているかと思われる作者だが、平和に対する思いは熱い。合併の是非、父母の戦争経験の痛み。そして、平和も地つづき空つづきと世界の平和を心から願っている。それはご主人が議員であり政治を近くで見て来たから、一層感じるのかもしれない。小さな事から大きな事まで。戦争へのはじめの一歩は…と心を痛めている。それは、郡上一揆からのこの地に根づく安寧を願う気持ちが脈々と継承されていて、「一つの星」は、この手で守らなければいけないと心に誓う姿に重なる。

一見、穏やかなしあわせを感じさせる歌集だが、それは、河合さんが表には出さない努力や葛藤を静かに昇華させた上に出来ていることを見逃してはいけない。